

《抄 録》

本研究は、急激な社会の変化や子どもたちの教育をめぐる困難な状況を踏まえ、これからの日本を担う子どもたちを育成する教育として、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育をとらえ、その基本的な考え方と具体的な方法を明らかにすることをねらいとしている。研究は2年計画で進めており、第1年次である本年度は、児童・生徒対象のアンケート調査結果をもとに基本的な考え方を明らかにすることを目指した。

第1年次研究では、先行研究をもとに世界の中の日本人としてのアイデンティティを6つの構成要素（自己の確立、家庭への帰属意識、学校への帰属意識、地域への帰属意識、日本人としての意識、世界の一員としての意識）からとらえた。そして、この6つの構成要素と関係があると考えられる能力や意識、経験等として7つの育成の視点（コミュニケーション能力、問題解決能力、感性、貢献意識、規範意識、日本文化の理解・経験、異文化の理解・経験）を設定し、小学生、中学生、高校生対象のアンケート調査によりその実態と各要素間の関係を調べた。

その結果、世界の中の日本人としてのアイデンティティの構成要素として重要な「自己の確立」は「日本人としての意識」の発達と関係があること、「日本人としての意識」と「世界の一員としての意識」は互いに関係していること、コミュニケーション能力、感性、問題解決能力は世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ上で重要であること等が明らかになった。

この結果をもとに、学校教育への提言として、次の7つをまとめた。

- (1) 学校では「自己の確立」を重視する観点から教育目標等を見直すことが必要である。
- (2) 「自己の確立」と関係のある「日本人としての意識」をはぐくむため、学校では我が国の歴史や文化を学ぶ機会をさらに充実させることが必要である。
- (3) 「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」をはぐくむ教育は関連させて行うとともに、感性やコミュニケーション能力等を発揮できる展開が大切である。
- (4) 家庭や地域と連携した教育活動を充実させ、帰属意識が育つようにすることが大切である。
- (5) 「自己の確立」に関係のある自己表現力等をはぐくむため、児童・生徒が自分で考え、自分の考えをもち、それを自分の言葉で表現できる学習指導を工夫する必要がある。
- (6) 児童・生徒が自らの学習過程を振り返り、新たな自分の目標や課題をもって学習を進められるような評価の在り方や方法を工夫する必要がある。
- (7) ボランティア活動等の社会体験を一層充実させ、貢献意識を育てるとともに広い視野をもてるようにすることが大切である。

本報告書の内容は教育内容の見直しの観点、保護者会の資料等として活用が可能である。なお、第2年次研究では具体的な教育方法を中心に研究を進める予定である。

目 次

研究の視点と方法	3
1 主題設定の背景	3
2 研究の視点	4
3 研究の方法	5
世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の考え方	
～「構成要素」に関する調査結果と考察から～	7
1 「構成要素」に関する調査結果の概要	7
2 「自己の確立」と相互に関係している「構成要素」	9
3 「自己の確立」以外の「構成要素」間の相関	11
4 世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の考え方	13
世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ視点	
～「育成の視点」に関する調査結果と考察から～	14
1 「育成の視点」に関する調査結果の概要	14
2 「構成要素」と相互に関係している「育成の視点」	17
3 世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ視点	20
世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育実施上の留意点	
～発達段階に着目した調査・分析結果から～	22
1 「日本のよさを感じる時」等の調査結果の概要と考察	22
2 「問題解決能力」等に関する小学校と中学校の比較（因子分析から）	24
3 「構成要素」と「育成の視点」との相関関係（校種による違い）	25
4 学年進行にともなう実態の違いに着目した考察	26
5 世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育実施上の留意点 ...	27
研究のまとめ	28
1 世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の具体化の視点 ...	28
2 今後の課題	29
参考文献一覧	30
資 料	31

研究の視点と方法

1 主題設定の背景

グローバル化やIT（情報技術）革命の推進など、新世紀に入って、人々の暮らしはますます便利になっていくかに思われている。現代社会のこのような状況について、「ものが豊かになっても、不安や苦しみは少なくなるどころか、逆に増えているのではないか」と述べる河合隼雄氏は、道を歩いていても世界情勢がつぶさに分かるような情報洪水の中で、人々は「もっとも身近な情報に関心が向き、…（中略）…自分自身のこと、自分は何者かについて、もっとも情報が欠如していることに思い至る」としている。氏は、科学技術を進めることと同時に、自己についての探求をおろそかにしてはならないと、現代に警鐘をならしている⁽¹⁾。このことは、「『何がいちばん好きか、何をいちばんしたいか』ということが、自分でわからないほど、自分のアイデンティティをなくしてしまっている」⁽²⁾若者が増えていると言われていることと同様、その時々状況を一人一人が主体的に考え、判断し、行動するなど、自ら問題を解決していく力や自立心の育成が現代の重要な課題となっていることを物語っている。

一方、経済・社会の急速なグローバル化の進展は、わが国自身に、国際社会における明確な存在価値（アイデンティティ）の確立を求めている。国際社会において、我が国はどのような個性をもち、どのような役割を果たし得るのか、我が国を構成する国民一人一人に展望を描く力が求められている。この点で河合氏は、「国際関係のなかでしっかりと位置を確保していくためには、日本人は相当に覚悟を決めて、それぞれの人間が『個の確立』を求めて努力すべきであろう」と述べている。そしてそのためには、国際社会の中で、自分の考えや気持ちを述べることができる「自己表現力」を身に付けていくことの重要性を指摘する⁽³⁾。ここからは、我が国の歴史や伝統文化などについての理解を深めるとともに、広い視野をもち、異なる文化を理解、尊重していくことを通して自己を確立し、自己（又は自分の国）を表現する力をもった「国際社会に生きる日本人」の育成が求められていることが分かる。

東京都教育委員会は、平成13年1月11日決定の教育目標及び基本方針の中の【基本方針2「豊かな個性」と「創造力」の伸長】において、「世界の中の日本人としてのアイデンティティを育てる教育を推進する」ことの重要性を示した。そこでは、「グローバル化と情報技術革命が進む東京にあって、国際社会に生き社会の変化に対応できるよう、子どもたち一人一人の思考力、判断力、表現力などの資質・能力を育成することを求めている。そのために、基礎的な学力の向上を図り、子どもたちの個性と創造力を伸ばす教育を重視するとともに、国際社会に生きる日本人を育成する教育を推進する」ことが必要であるとされている。具体的な内容としては、「日本や世界の文化・伝統に触れる機会の充実を図り、郷土に対する愛着や誇りをはぐくむとともに、多様な文化に対する理解を深め、世界の中の日本人としてのアイデンティティを育てる教育を推進する」ことを示している。

「国際社会に生きる日本人」の育成に関しては、既に昭和62年8月の臨時教育審議会の最終答申で、その必要性が指摘されており、また、平成8年7月の中央教育審議会の第一次答申でも、「日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること」「自分自身の座標軸を明確に持つこと」の重要性が掲げられていた。とはいえ、地方自治体の教育目標として「世界の中の

日本人としてのアイデンティティ」という文言が用いられたのは、おそらく未だかつてないことであろうし、そこでは、単に国際理解教育の推進にとどまらない、教育全般にわたって、個人としての自己の確立を図ると同時に、世界の中の日本人としての存在価値をも創造していくことができるような、いわば、21世紀を生きる豊かな教養を身に付けた人間の育成が求められていると言える。この点で、阿部謹也氏の教養の定義に注目してみたい⁽⁴⁾。氏は、日本において、個人と社会の間であって個人の行動を大きく規制している「世間」という存在に焦点を当て、現場主義による学問や教育の再構成を提言する中で、教養を次のように定義する。「教養とは自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のために何ができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している態度である。」このような日本的な「教養」を一人一人が身に付けていくことが、日本が世界の中でどのような位置にあり、世界のために何ができるかを知ろうと努力する態度の育成へとつながっていくものであると考える。

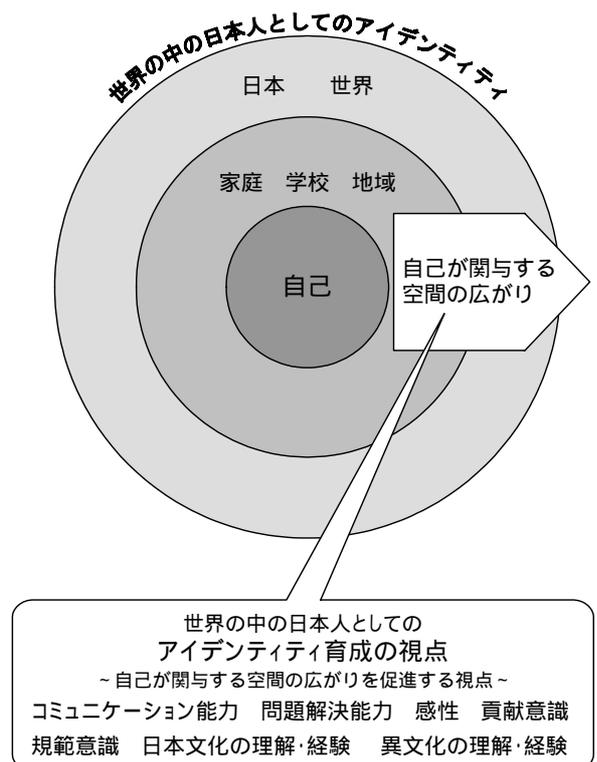
このような背景を踏まえ、本研究では、最初に、「世界の中の日本人としてのアイデンティティ」を育成するための基本的な考え方を明らかにし、次に、「世界の中の日本人としてのアイデンティティ」を育成する教育活動を具体的に進めていく上での観点を提示することを第1年次である本年度のねらいとした。

2 研究の視点

(1) 世界の中の日本人としてのアイデンティティの構成要素

一般に、アイデンティティ (Identity) は、エリクソン (Erikson, E.H) によって定義された精神分析的自我心理学の基本概念であり、「自分が一貫して自分自身であるという安定感を持ちながら、しかも社会の中の一員として機能していると意識できる自己存在感」ととらえることができる。そしてこのようなアイデンティティは、対人関係の発達や社会性の発達、さらには所属集団の空間的拡大と深い関わりをもって発達すると考えられ、たとえばそれは、母をのみ「重要な他者」としていた幼児が、家族全体を「意味ある他者」として認識できるようになっていくように、所属集団が拡大するにつれ「家族の一員としての自分」「集団の中の自分」「日本人としての自分」といった意識(「その集団に対する自らの帰属意識」)がはぐくまれていくと考えられている。

そこで本研究では、右図円のように、世界の中の日本人としてのアイデンティティを、各個人が出生以来の家族をはじめ、学校、地域、日本、世界と広がる対人関係の中ではぐくまれる「自己」の姿と捉え、具体的に「自己の確立」「家庭への帰属意識」「学校への帰属意識」「地域への帰属意識」「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」の6つを世界の中の日本人としてのアイデンティティの構成要素として考えた(以下「構成要素」と記す)。



冒頭でも述べたとおり、現代は一人一人の多様な生き方が可能になる一方で、同時に社会的な一体感が失われつつあり、個人は家族や集団の中で自らのアイデンティティを確認しづらくなっている。

研究では、ここに取り上げた6つの「構成要素」を手掛かりに、現在の子どもたちが、家庭、学校、地域への帰属意識をどの程度もち、そのことが「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」そして「自己の確立」とどのような関係にあるのかを検討することで、世界の中の日本人としてのアイデンティティの基本構造を明らかにしようと考えた。

(2) 世界の中の日本人としてのアイデンティティを育成する視点

前項では、自己が関与する所属集団の拡がりを手掛かりに、世界の中の日本人としてのアイデンティティのモデル図を仮説的に提示した。研究ではさらに、所属集団の空間的拡がりを促し、各「構成要素」の内容を充実させるための教育的働きかけとして、「コミュニケーション能力」「問題解決能力」「感性」「貢献意識」「規範意識」「日本文化の理解・経験」「異文化の理解・経験」の7つ（以下「育成の視点」と記す）を設定した（前図下部参照）。

「コミュニケーション能力」は、「アイデンティティはその人の言語によって規定される」⁽⁵⁾とされていることや先の河合氏の指摘にもあるように、今後、国際社会の中で豊かな「自己表現力」を身に付けていく上でも最も重要な視点であると思われる。また、「問題解決能力」は、今日の時代状況を一人一人が主体的に考え判断し行動する力として期待されているものであり、同時に自分自身の新たな可能性を引き出すなど、自己の確立と深いかかわりをもった視点であるとする。さらに、「貢献意識」や「規範意識」は、アイデンティティが他者や社会からの承認やかかわりを要すること、「感性」は、感動や驚き、発見や気づき、喜びや実感が自己の存在感や有効感を高めることと関係が深いとされている⁽⁶⁾ことなどを考慮して育成の視点として取り上げた。そして、「日本文化の理解・経験」「異文化の理解・経験」に関しては、「自文化についての体験とそれらに対する帰属意識は相互に影響し合っている」⁽⁷⁾とされているように、言うまでもなく、自文化や異文化に対する理解や経験は、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくんでいく上で重要な視点である。

本研究では、これら7つの育成の視点と先にあげた6つの構成要素との関連を調べることで、世界の中の日本人としてのアイデンティティの育成が、教育全般にわたって行われていくものであり、子どもたち一人一人が自分に自信をもち、家庭、学校、地域への帰属意識を高め、我が国の歴史や伝統文化などについて理解を深めつつ国際社会に生きるための広い視野をもてる教育の実現を目指すものであることを検討していきたい。

3 研究の方法

(1) 調査研究

「世界の中の日本人としてのアイデンティティ」の「構成要素」と「育成の視点」がどのような関係にあるか調べるため、アンケート調査を実施した。

事前調査

ア 都内公立小・中・高等学校の児童・生徒に対するアンケート調査を実施した。

○期 間 平成13年7月12日（木）～7月19日（木）

○対象	小学校4年生・43名	5年生・54名	6年生・51名
	中学校1年生・64名	2年生・72名	3年生・64名
	高等学校1年生・73名	2年生・72名	総計・493名

イ 事前調査の結果

「日本人としての意識」と「世界の一員としての意識」との間には相関関係があることや「自己の確立」は「家庭や学校への帰属意識」と相関があるが、校種によって異なることなどが明らかになった。世界の中の日本人としてのアイデンティティを構成する要素と育成の視点についても、多くの項目にわたって相関が見られることが明らかになり、調査の有効性が確認できた。

また、事前調査の結果を因子分析等の統計学的方法で処理・分析し、質問項目を再度吟味し、一部削除と修正を行った。

本調査

ア 改定した質問項目により、下記のようにアンケート調査を実施した。

○期間	平成13年9月～10月		
○対象	小学校5年生・208名	6年生・244名	
	中学校1年生・248名	2年生・278名	
	高等学校1年生・218名	2年生・210名	総計・1,406名

(2) 学習指導要領・先行実践の分析

学習指導要領をもとに、世界の中の日本人としてのアイデンティティの育成の視点にかかわる目標及び内容が各教科領域等にどのように配置されているかを分析した。

具体的な教育活動を構想するため、先行的に行なわれている実践を収集・分析した。

以下では、第 3 章において「構成要素」に関する調査結果から、現在の子どもたちが、家庭、学校、地域への帰属意識をどの程度もち、そのことが「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」そして「自己の確立」とどのような関係にあるのかを明らかにする。次いで第 4 章で「育成の視点」に関する調査結果から、育成の視点と「構成要素」との関連を調べ、学校において、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむための視点を検討する。第 5 章では、前章で明らかとなった視点を発達段階に着目して検討し、学年の進行に合わせたきめ細かい方策を提示する。第 6 章では、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の具体化の手だてと次年度研究に向けた課題を整理する。

注 (1)河合隼雄『日本人の心』潮出版社 2001年 11頁

(2)石原慎太郎『いま、魂の教育』光文社 2001年 230頁

(3)河合隼雄 前掲書 10頁

(4)阿部謹也『学問と「世間」』岩波新書 2001年 124頁

(5)賀来弓月『内なるものと外なるものを』日本経済評論社 2001年 33頁

(6)遠藤友麗「感性教育のすすめ」日本社会教育連合会『社会教育』2001年12月号 4頁

(7)J.A.ハンス(山岸みどり訳)「市民教育、多様性、カリキュラム変革」異文化間教育学会『異文化間教育』15 2001年 107頁

世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の考え方 ～「構成要素」に関する調査結果と考察から～

ここでは、本研究が世界の中の日本人としてのアイデンティティの構成要素と考えた6つの項目について実態を明らかにするとともに、各要素間の相関を分析し、その結果をもとに世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の基本的考え方を整理して述べる。

1 「構成要素」に関する調査結果の概要

(1) 自己の確立

児童・生徒の自己の確立にかかわる意識を、「自己肯定」「目的意識」の観点から尋ねた。質問を作成するにあたっては、調査対象が小学生から高校生までに広がっていることを考え、抽象的な質問にならないよう配慮した。

下記に示す5項目を、「よくあてはまる」を4点、「あてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点とし、各質問及びカテゴリーごとに集計した。なお、逆転項目の質問は、この逆に1点 2点 3点...として集計し、「自己の確立」以外のカテゴリーについても同様の方法で集計している。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
-1	自分のことが好きだ	2.66	2.36	2.36	2.46
-2	自分には夢中になってやってみたいことがある	3.26	3.18	3.08	3.18
-3	自分が何をしたらいいのか、よくわからないときがある (逆転項目)	2.34	2.18	1.97	2.17
-4	自分のやっていることには自信をもっている	2.47	2.35	2.36	2.39
-5	自分は、他の人から信頼されていると思う	2.13	2.06	2.22	2.13
	「自己の確立」全体	2.57	2.43	2.40	2.47

(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

「自己の確立」全体の平均は「世界の中の日本人としてのアイデンティティ」を構成する6つの要素の中で最も低くなっている。また校種が上がるにつれて数値が下がる傾向がある。様々な調査から、国際的にみて我が国の児童・生徒の自分に対する評価や自信の程度は低いことが指摘されているが、今回の調査はそれを裏付けるものとなっている。

(2) 家庭への帰属意識

家庭における是認された役割の達成意識に基礎づけられた肯定的な自己像を、「愛着」「誇り」「貢献」の3つの観点から尋ねた。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
-6	家族のだれかにいいことがあると、自分もうれしい	3.14	2.95	2.94	3.01
-7	家族の役に立てるととてもうれしい	3.22	2.89	2.84	2.98
-8	家族といっしょにいるのが好きだ	3.22	2.75	2.56	2.85
	「家庭への帰属意識」全体	3.19	2.86	2.78	2.94

(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

「家庭への帰属意識」は校種が上がるにつれて数値が下がる傾向があるが、全体平均は6つの構成要素の中で2番目に高くなっている。

(3) 学校への帰属意識

学校への帰属意識を、「愛着」「誇り」「貢献」の3つの観点から尋ねた。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
- 9	クラスの仕事をわりと積極的にやっている	2.41	2.41	2.22	2.35
-10	今、学校の生活は楽しい	3.04	3.01	2.88	2.98
-11	自分の学校の人が活躍するとうれしくなる	2.69	2.61	2.66	2.66
	「学校への帰属意識」全体	2.71	2.68	2.59	2.66

(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

「学校への帰属意識」についても校種が上がるにつれて下がる傾向が見られる。全体平均は6つの構成要素の中で下から3番目であり、高いとは言えない。

(4) 地域への帰属意識

地域への帰属意識を、東京への「愛着」「誇り」の2つの観点から尋ねた。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
-12	東京のよさを言うことができる	2.27	2.30	2.36	2.31
-13	これからも東京で暮らしたいと思う	3.08	3.04	2.85	3.00
	「地域への帰属意識」全体	2.68	2.67	2.61	2.65

(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

「地域への帰属意識」全体の平均は、6つの構成要素の中で下から2番目の低さとなっている。

(5) 日本人としての意識

日本の伝統や文化、自然等について、「愛着」「誇り」「尊重」「継承」の4つの観点から尋ねた。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
- 4	日本人も外国の人も、自分の国の文化を大切にするのは当然だと思う	3.38	3.32	3.31	3.33
- 6	日本(自分の国)の自然が好きだ	3.38	3.10	3.21	3.22
- 7	自分は日本(自分の国)のことばを大切にしている	2.92	2.81	2.83	2.85
- 8	昔から伝わってきた日本(自分の国)の行事をずっと残したいと思う	3.13	3.02	2.98	3.04
- 9	日本人(自分の国の人)がすぐれた技術をもっていると世界から認められることはうれしい	3.16	3.10	3.26	3.17
-10	日本(自分の国)のよさを言うことができる	2.53	2.66	2.71	2.63
	「日本人としての意識」全体	3.08	3.00	3.05	3.04

(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

「日本人としての意識」全体の平均は、6つの構成要素の中で最も高くなっている。校種が上がるにつれ、数値が中学校で一度下がったあと高等学校で上がっているのが特徴である。

質問ごとの回答状況を見ると、「日本(自分の国)のよさを言うことができる」が6つの質問の中で最も低くなっている。多田孝志氏は異文化共生社会における自己表現力を「相手を

意識し、引きつけ説得する力」であると説明し、さらに「相手を説得し引きつける表現の基礎は、内容（情報・話題等）と個性的な見解や感覚にある」と述べている⁽¹⁾。児童・生徒が自分の国のよさを自分の言葉で説明できることは国際社会を生きる上で大切な力であると言える。児童・生徒が自分の国についての認識を深めるようにすることは学校においても重要な課題である。また、「日本（自分の国）のことばを大切にしている」がその次に低かったことも、合わせて今後検討を要する課題である。

(6) 世界の一員としての意識

外国の文化や習慣等について、「尊重」「寛容」「共生」の3つの観点から尋ねた。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
- 1	外国の生活や文化について、もっと知りたいと思う	2.65	2.58	2.77	2.66
- 2	外国の人と言葉の違いを越えて理解し合いたいと思う	2.82	2.74	2.86	2.80
- 3	外国の人と意見が違って、自分の意見をしっかりと伝えることは大切だ	3.15	3.14	3.26	3.18
- 5	世界の人々のために役立つことをしたい	2.91	2.79	2.77	2.82
	「世界の一員としての意識」全体	2.88	2.81	2.92	2.87

(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

「世界の一員としての意識」全体の平均は6つの構成要素の中で3番目に高くなっている。「日本人としての意識」と同様、校種が上がるにつれて数値が中学校で一度下がったあと高等学校で上がるという特徴が見られる。その中において、「世界の人々のために役立つことをしたい」については校種が上がるにつれて数値は下がり続けており、国際社会へ貢献する意識については課題があることが分かる。

2 「自己の確立」と相互に関係している「構成要素」

我が国の児童・生徒の自分に対する評価や自信の程度は国際的にみて低く、これを高めることが課題となっている。そこで「自己の確立」と相互に関係している「構成要素」を調べ、これをもとに改善のための手立てを探る必要があると考えた。

下表は「自己の確立」に関する回答状況と他の5つの「構成要素」に関する回答状況から相関係数を求め、校種ごとに示したものである。

構 成 要 素	小学校	中学校	高等学校	全 体
家庭への帰属意識	0.34	0.35	0.31	0.35
学校への帰属意識	0.42	0.38	0.33	0.38
地域への帰属意識	0.29	0.24	0.16	0.23
日本人としての意識	0.40	0.40	0.32	0.37
世界の一員としての意識	0.34	0.31	0.24	0.29

相関係数が0.2以上の場合に相関があるととらえることができる。

(表中の数値はピアソンの相関係数)

この結果から、全体では5つの「構成要素」すべてが「自己の確立」と相関があることが分かる。本研究では、5つの「構成要素」の中から比較的相関係数の数値が高い「家庭への帰属意識」「学校への帰属意識」「日本人としての意識」の3つに着目することとした。

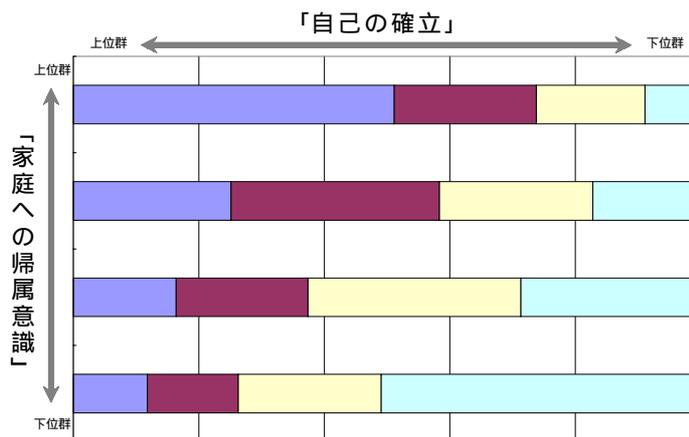
(1) 「家庭への帰属意識」との関係

「自己の確立」と「家庭への帰属意識」とは全校種にわたって相関がある。

右のグラフは「家庭への帰属意識」の回答と、「自己の確立」の回答とをクロス集計した結果を示している。「家庭への帰属意識」の上位群ほど、「自己の確立」の数値が高くなっていることが分かる。

星野周弘氏は、「家庭への帰属意識」が高い子どもほど、幼少の頃から放任されることなく家庭で役割行動を果たしていることを調査で明らかにしている⁽²⁾。「家庭への帰属意識」を高めるためには子どもたちに家庭での「居場所」を保障し、家族からの肯定的な承認が得られるようにすることが重要になっている。

「家庭への帰属意識」と「自己の確立」(全体)



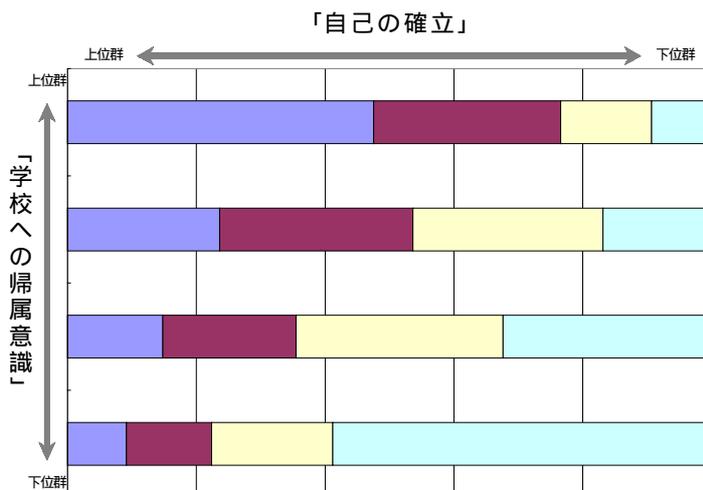
(2) 「学校への帰属意識」との関係

「自己の確立」と「学校への帰属意識」とは全校種にわたって相関がある。

右のグラフは「学校への帰属意識」の回答と、「自己の確立」の回答とをクロス集計した結果を示している。「学校への帰属意識」の上位群ほど、「自己の確立」の数値が高くなっていることが分かる。

「学校への帰属意識」が高くなるように教育活動を工夫することは、児童・生徒の「自己の確立」を図る上で大切であると言えることができる。

「学校への帰属意識」と「自己の確立」(全体)

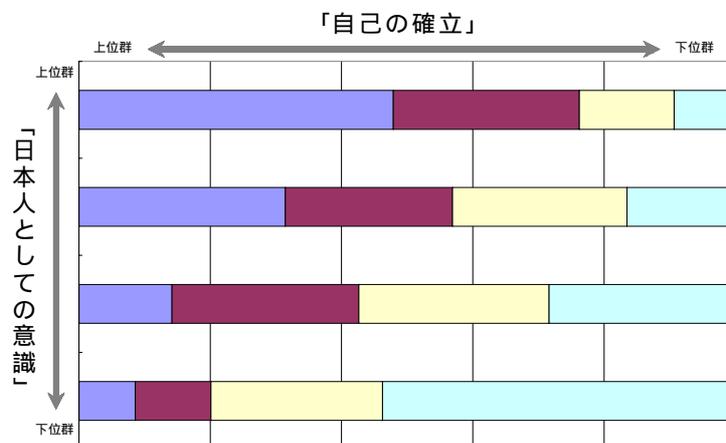


(3) 「日本人としての意識」との関係

「日本人としての意識」と「自己の確立」とは全校種にわたって相関がある。

右のグラフは「日本人としての意識」の回答と、「自己の確立」の

「日本人としての意識」と「自己の確立」(全体)



回答とをクロス集計した結果を示している。「日本人としての意識」の上位群ほど、「自己の確立」の数値が高くなっていることが分かる。

3 「自己の確立」以外の「構成要素」間の相関

世界の中の日本人としてのアイデンティティの6つの構成要素のうち、「自己の確立」以外の要素間の相関係数を下表に示した。

	家庭への帰属意識	学校への帰属意識	地域への帰属意識	日本人としての意識	世界の一員としての意識
家庭への帰属意識	/	0.38	0.21	0.43	0.40
学校への帰属意識	0.38	/	0.29	0.41	0.38
地域への帰属意識	0.21	0.29	/	0.36	0.21
日本人としての意識	0.43	0.41	0.36	/	0.52
世界の一員としての意識	0.40	0.38	0.21	0.52	/

(表中の数値は小学校、中学校、高等学校を合わせた集団について求めたピアソンの相関係数)

一般に、相関係数が 0.4 以上である場合はやや強い相関があるとされている。この観点から、本研究では次の項目間の相関に着目し、分析することとした。

- 「家庭への帰属意識」と「日本人としての意識」及び「世界の一員としての意識」
- 「学校への帰属意識」と「日本人としての意識」
- 「日本人としての意識」と「世界の一員としての意識」

(1) 「家庭への帰属意識」と「日本人としての意識」及び「世界の一員としての意識」

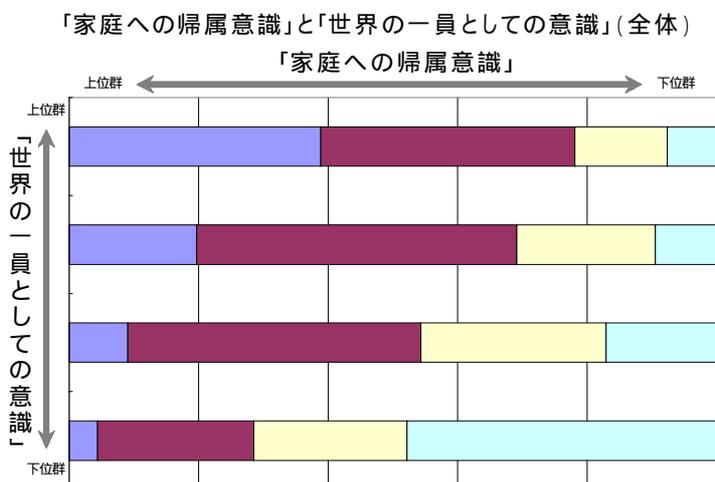
右の表は、「家庭への帰属意識」と「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」との相関係数を校種別に示している。

「家庭への帰属意識」と「日本人としての意識」				
	全体	小学校	中学校	高等学校
相関係数	0.43	0.47	0.45	0.39

「家庭への帰属意識」と「世界の一員としての意識」				
	全体	小学校	中学校	高等学校
相関係数	0.40	0.42	0.47	0.33

また、右下のグラフは、「家庭への帰属意識」と「世界の一員としての意識」との関係を示している。

これらの結果から、いずれの校種についても、「日本人としての意識」の数値が高いほど、あるいは「世界の一員としての意識」の数値が高いほど、「家庭への帰属意識」の数値も高くなっていることが分かる。



(2) 「学校への帰属意識」と「日本人としての意識」

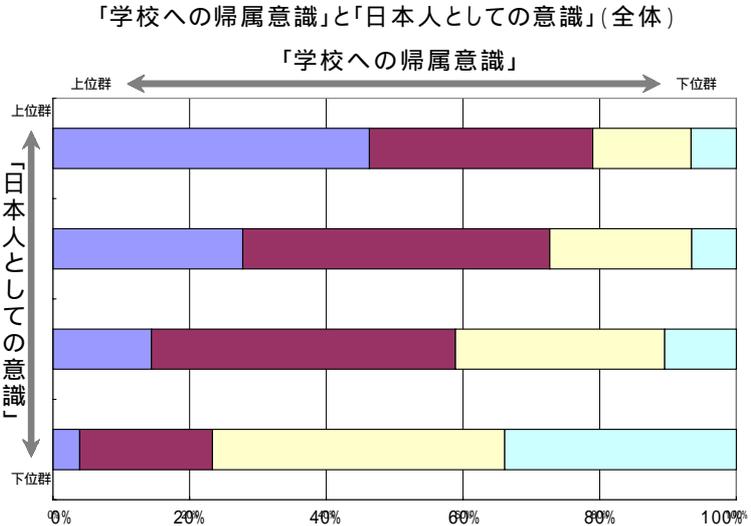
右の表は、「学校への帰属意識」と「日本人としての意識」との相関係数を校種別に示している。

「学校への帰属意識」と「日本人としての意識」				
	全体	小学校	中学校	高等学校
相関係数	0.41	0.50	0.48	0.25

また、右下のグラフは、この関係を示している。

表及びグラフから、「日本人としての意識」が高いほど「学校への帰属意識」も高くなっていることが分かる。

「学校への帰属意識」と「日本人としての意識」との間の相関係数は、高等学校に比べ小学校及び中学校では高くなっている。「学校への帰属意識」をはぐくむための視点として、小学校及び中学校では「日本人としての意識」が重要であることを読みとることができる。

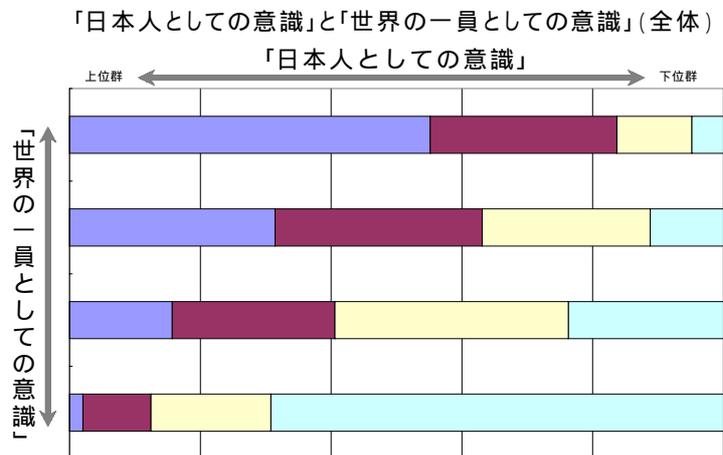


(3) 「日本人としての意識」と「世界の一人としての意識」

右の表は、「日本人としての意識」と「世界の一人としての意識」との相関係数を校種別に示している。ここから、両者の間に、全校種にわたってやや強い相関があることを読みとることができる。

「日本人としての意識」と「世界の一人としての意識」				
	全体	小学校	中学校	高等学校
相関係数	0.52	0.54	0.56	0.46

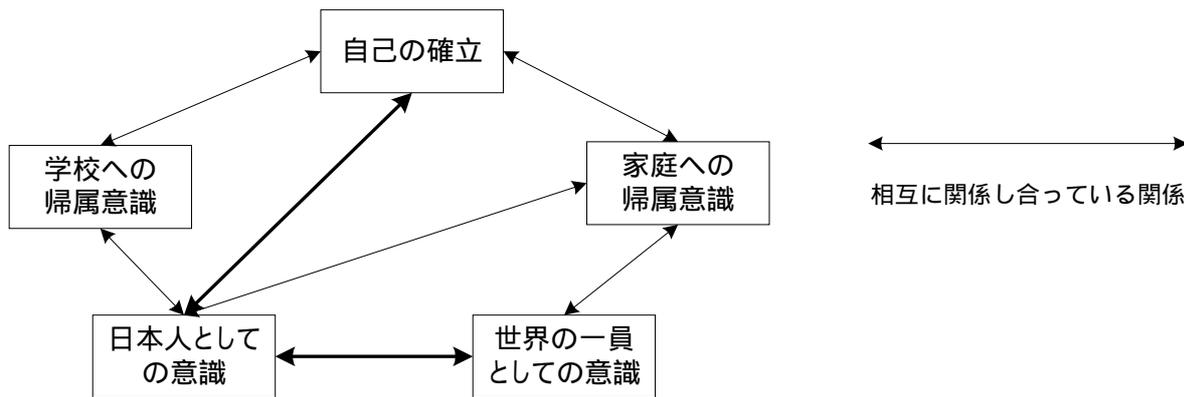
右のグラフは「世界の一人としての意識」と「日本人としての意識」の関係を示している。「世界の一人としての意識」が高いほど「日本人としての意識」も高くなっていることが分かる。



第15期中央教育審議会第一次答申(平成8年7月)は、「広い視野を持ち、異文化を理解し、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく態度などを育成するためには、子どもたちに我が国の歴史や伝統文化などについての理解を深めさせることが極めて重要なことになる」と述べている。今回の調査結果は、我が国の伝統文化などについての理解を深めることが、世界の中の一員としての意識をもはぐくんでいくことにつながるものであることを示しており、答申が述べていることを裏付ける結果となっている。

4 世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の考え方

世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育が目指すものを、6つの構成要素で考えると、その中心には「自己の確立」があり、これに「家庭への帰属意識」「学校への帰属意識」「地域への帰属意識」が互いに関係しつつ一体となった児童・生徒像であるといえることができる。下図はこれまで述べてきた調査結果の分析をもとに、このような要素間の関係を表したものである。図中の矢印は相関があることを示している。太い矢印は本研究が注目した関係を表している。なお、「地域への帰属意識」はアイデンティティにとって重要な要素であると考えられるが、今回の調査結果では他の要素との関係が明確でなかったため図中では省略してある。



このことから、下記の二点が明らかになった。

第一は「日本人としての意識」と「自己の確立」との関係である。本研究は、「日本人としての意識」が高いグループでは「自己の確立」の数値も高くなる傾向があることを明らかにしている。「自己の確立」には「家庭への帰属意識」「学校への帰属意識」が大切であるが、これと並んで「日本人としての意識」が大切な要素になっていることが調査から分かったことになる。図中に示したように、「日本人としての意識」は、この他にも3つの要素と相関があり、6つの構成要素の中でも重要な位置にあることが分かる。

第二に、「世界の一員としての意識」と「日本人としての意識」との関係である。「世界の一員としての意識」と「日本人としての意識」の間にはやや強い相関が見られる。この2つの意識は相互に関係して高まると考えられる。

世界の中の日本人としてのアイデンティティは、「自己」が関与する空間が「家庭」「学校」「地域」等へと広がり、それらへの帰属意識がはぐくまれ、それぞれの発達段階に応じ「自己」が確立していくとともに、さらに関与する空間が「日本」「世界」へと広がり、「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」が関係し合いながら発達し、これが「家庭への帰属意識」等や「自己の確立」とも関係し合うことではぐくまれると考えられる。

注 (1) 多田孝志『学校における国際理解教育』東洋館出版社 1997年 125頁

(2) 科学警察研究所「家庭及び学校に対する中・高校生の帰属意識と非行との関連に関する研究」1990年 12頁

世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ視点 ～「育成の視点」に関する調査結果と考察から～

ここでは、本研究が世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむための視点として考えた7つの項目について、その実態を明らかにするとともに、世界の中の日本人としてのアイデンティティを構成する要素との相関を分析し、その結果をもとに世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむための視点について整理して述べる。

1 「育成の視点」に関する調査結果の概要

(1) コミュニケーション能力

コミュニケーション能力について、-1～3は対人関係を中心に尋ねた。-4は、コミュニケーションに対する意欲を尋ねる質問である。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
-1	自分は、他人の考えを大切にする	2.69	2.70	2.83	2.74
-2	相手が話しやすいように、親しみをこめて話しかける	2.61	2.65	2.78	2.68
-3	話すとき、相手や目的に応じて話しかけるようにしている	2.75	2.87	3.07	2.89
-4	外国語をつかって自分の考えを伝えてみたい	2.69	2.48	2.51	2.56
-1	よくあいさつをする	3.15	3.11	2.93	3.07
	「コミュニケーション能力」全体	2.78	2.76	2.82	2.79

(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

-1～3の対人関係を尋ねた3つの質問は、校種が上がるに従って数値が高くなる。人間関係の広がり、こうした能力を高めていると考えられる。逆にあいさつについての質問は、小学校の数値が最も高い。

(2) 問題解決能力

問題解決能力を問題解決への意欲、学習の発展、学習結果の応用の面から尋ねた。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
-1	知りたいことや分からないことは自分で工夫して調べる	2.49	2.44	2.53	2.48
-2	学習をしていると知りたいことがたくさん出てくる	2.74	2.46	2.46	2.55
-3	勉強したことを自分で試したり、使ったりするほうだ	2.45	2.25	2.21	2.30
	「問題解決能力」全体	2.56	2.38	2.40	2.45

(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

全体として、小学校よりも中学校、高等学校で数値が下がる傾向にある。特に、小学校6年生と中学校1年生との間に有意な差があり、「学習をしていて知りたいことがたくさん出てくる」という質問に対しては、2.74から2.46へと大きく低下する。中学校における、問題解決的な学習の在り方について考えることの必要性を感じさせる結果である。

(3) 感性

人や自然に対する感じ方、伝統的な習慣・行事を迎える気持ちを尋ねることにより、感性の実態を探ろうとした。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
-6	「人間ってすごいな」と感動したことがある	2.80	2.77	3.03	2.86
-7	道ばたに咲いている花を見て、美しいと思ったことがある	2.57	2.57	2.85	2.66
-8	新しい年を迎えたとき、新鮮な気持ちになる	3.05	2.96	3.07	3.02
	「感性」全体	2.81	2.77	2.98	2.85

(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

この項目は平均が 2.85 と、規範意識に次いで高い数値を示している。特に、「新しい年を迎えたとき、新鮮な気持ちになる」の質問については、どの校種においても数値が高い。校種別にみると、すべての質問において高校生が最も高い数値を示す。様々な経験の広がり感性の高まりとの関連をうかがうことができる。

(4) 貢献意識

ボランティア活動の経験の有無、積極的に他人の役に立つ行為の経験の質問から、貢献意識の実態を探ってみた。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
-2	自分から進んでボランティア活動をしたことがある	2.10	2.20	2.30	2.20
-4	他の人の仕事を、進んで手伝うことがある	2.61	2.48	2.50	2.53
	「貢献意識」全体	2.36	2.34	2.40	2.36

(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

貢献意識全体の平均が、2.36 と低い。特にボランティア活動については、経験の少なさをそのまま表した結果となっている。しかし、中学 1 年生の平均が 2.03 なのに対し、中学 2 年生は 2.34 と有意差をもって数値が上がっている。学校教育におけるボランティア活動導入の影響が考えられる。-4 の質問については、-2 の回答傾向と逆に小学生に比べて中学生、高校生の数値が低くなるが、その要因については今後検討する必要がある。

(5) 規範意識

公の場でのルールや人間関係でのルールを守ろうとする意識があるかどうかを尋ねることにより、規範意識の実態を探ろうとした。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
-3	悪いと思ってても列の割り込みをしてしまうことがある (逆転項目)	3.07	2.98	3.02	3.02
-5	みんなで決めた約束は、必ず守るようにしている	2.85	2.75	2.93	2.83
	「規範意識」全体	2.96	2.86	2.97	2.93

(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

この項目は平均が 2.93 と、7つの育成の視点の中で最も高くなっている。社会生活を送る上での基本的なルールについての考え方は、身に付いていると思われる。

(6) 日本文化の理解・経験

日本の文化や歴史に関する直接的・間接的な体験を尋ねることにより、日本文化にかかわる理解や経験の実態を探った。特に -7・8 の質問は、家庭における日常的な経験の状況を尋ねたものである。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
-5	日本に伝わる伝統文化を実際に体験したことがよくある	2.21	2.48	2.49	2.40
-6	日本の歴史についての本を読んだり、テレビを見たりすることがよくある	2.64	2.35	2.32	2.43
-7	自分の家では昔から伝わる季節の行事をよくやる	2.15	2.14	2.14	2.14
-8	日本のことわざや言い伝えについて、家の人から聞くことがよくある	2.33	2.18	2.02	2.18
「日本文化の理解・経験」全体		2.33	2.29	2.24	2.29

(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

この項目全体の平均は 2.29 で 7 つの視点の中で 2 番目に低く、日本の文化に関する経験が少ないことを示していると考えられる。校種別でみると、校種が上がるにしたがって数値が低くなる傾向がある。また、家庭での経験を尋ねた質問に対する数値は、全校種とも低く、家庭内での経験が少ないことが考えられる。第 4 章の「日本人としての意識」にかかわる「自分は日本のことばを大切にしている」という質問の数値が低かったが、-8 の回答に見られるように、家庭でことわざや言い伝えについて聞く経験が少ないということとの関連をうかがうことができる。こうしたことは、学校での教育活動を構想する際、十分考慮していかなければならないだろう。

(7) 異文化の理解・経験

外国の文化や外国の人と接した経験や学習した経験を聞くことにより、児童・生徒の異文化にかかわる理解や経験の状況を探った。

	質 問 内 容	小学校	中学校	高等学校	全体平均
-1	外国の音楽を聞いたり、外国の映画を見たりすることがよくある	2.82	3.02	3.23	3.02
-2	外国の人と話したり、いっしょに遊んだりすることがよくある	1.83	1.59	1.50	1.64
-3	自分から進んで外国の生活や文化について詳しく調べたことがある	1.73	1.82	1.81	1.79
-4	外国の生活や文化の話聞いて、とても感動したことがある	2.09	2.09	2.36	2.17
「異文化の理解・経験」全体		2.12	2.13	2.23	2.16

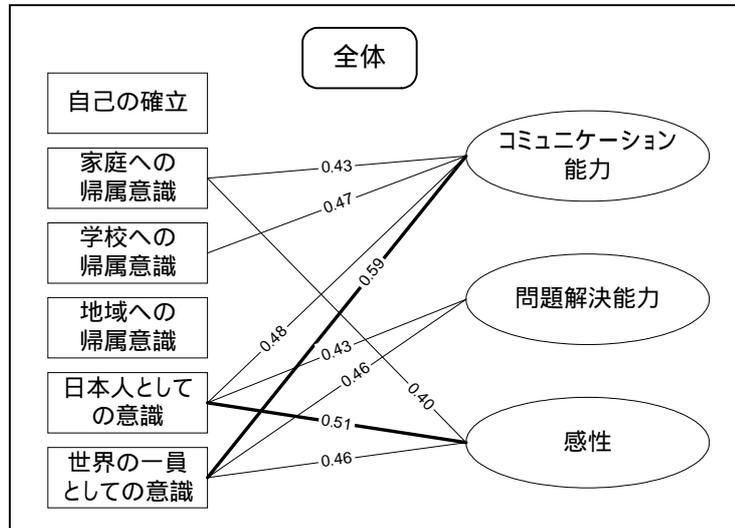
(表中の数値は質問項目ごとの平均点)

この項目全体の平均は、2.16 で 7 つの視点の中で最も低い。外国の文化や人と接した経験が少ないことによる結果であると思われる。4 つの質問の中では、-1 の「外国の音楽や映画と接する経験」だけが高い数値を示し、しかも校種が上がるにしたがって高くなる。間接的な経験ではあるが、具体的な教育活動を構想する際に考慮することが必要である。

2 「構成要素」と相互に関係している「育成の視点」

(1) 「コミュニケーション能力」「問題解決能力」「感性」と「構成要素」との関係

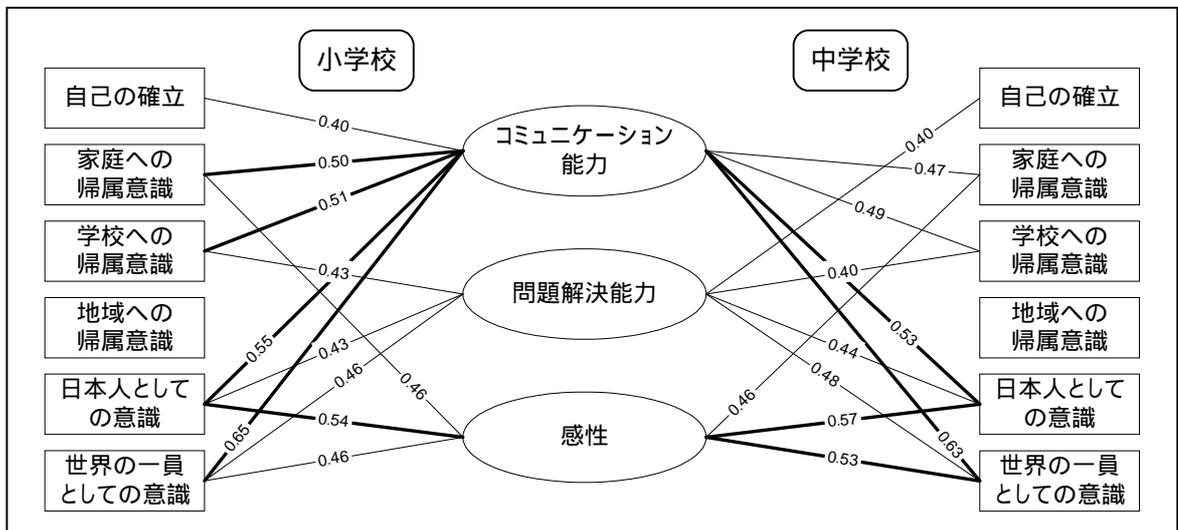
「コミュニケーション能力」は、世界の中の日本人としてのアイデンティティを構成する6つの要素のうち、「家庭への帰属意識」「学校への帰属意識」「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」の4つの要素と相関があり、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ上で最も影響の大きい「育成の視点」である。特に、「世界の中の一員としての意識」とは0.59という相関係数を示している。



相関係数0.4以上を——、0.5以上を——で示した。また、必要に応じて0.4未満のものも-----で示した。

校種別にみると、小学校段階では「自己の確立」を含めた5つの要素と相関があり、中学校では「自己の確立」を除く4つの要素、高等学校では「学校への帰属意識」「世界の一員としての意識」の2つの要素と相関がある。

世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむために、「コミュニケーション能力」は欠くことのできない重要な視点であると考えられる。

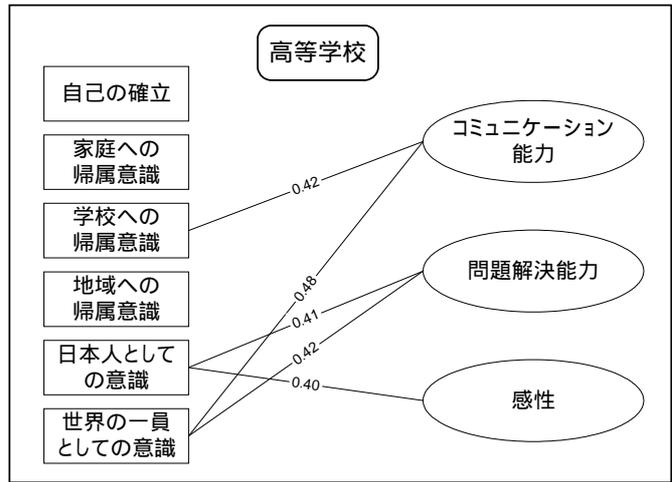


「問題解決能力」は、「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」の2つの要素と相関がある。この関係は、小学校、中学校、高等学校とすべての校種で同じ傾向を示す。「問題解決能力」の育成が、この2つの意識をはぐくむための重要な視点であると考えられる。

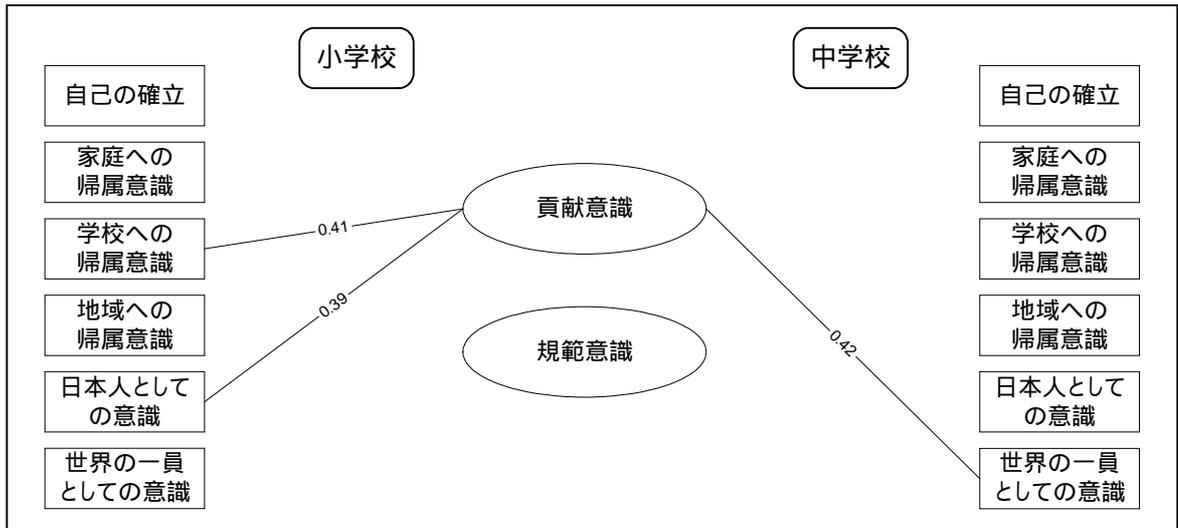
「感性」と「構成要素」との関係を全体でみると、「家庭への帰属意識」「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」の3つの構成要素と相関があり、特に「日本人としての意識」とは0.51の相関係数を示す。

校種別にみると、小学校、中学校では、前記の3つの意識と相関関係にあるが、高等学校では「日本人としての意識」との相関だけとなる。「日本人としての意識」をはぐくむためには、「感性」が重要な役割を果たすと考えられる。

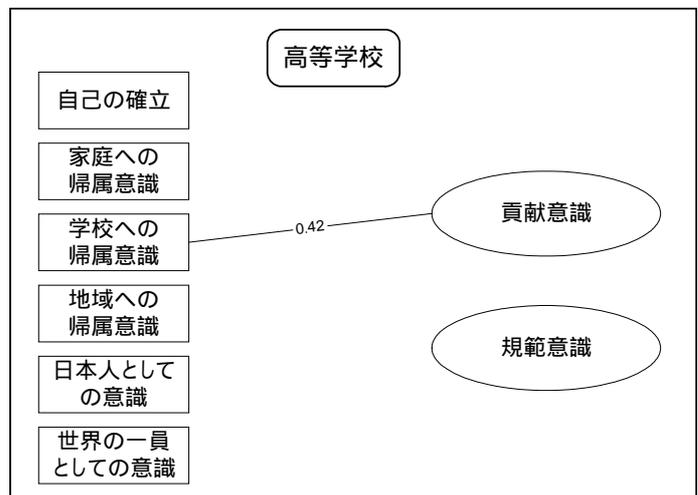
今まで述べてきた「コミュニケーション能力」「問題解決能力」「感性」は、いずれも中央教育審議会第一次答申（平成8年7月）で示された学校教育で育成すべき重要な資質・能力である。したがって、改訂された学習指導要領の考え方に基づく教育活動を充実させる中で、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむことを意識し、他の育成の視点とからめながら、これらの能力を培うことが重要であると考えられる。



(2) 「貢献意識」「規範意識」と「構成要素」との関係



「貢献意識」は、小学校で「学校への帰属意識」と「日本人としての意識」、中学校では「世界の一員としての意識」と相関がある。また、高等学校では「学校への帰属意識」との相関がある。全体での相関を詳しくみると、相関係数は高くはないが「家庭への帰属意識」「学校への帰属意識」「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」とも相関がある。



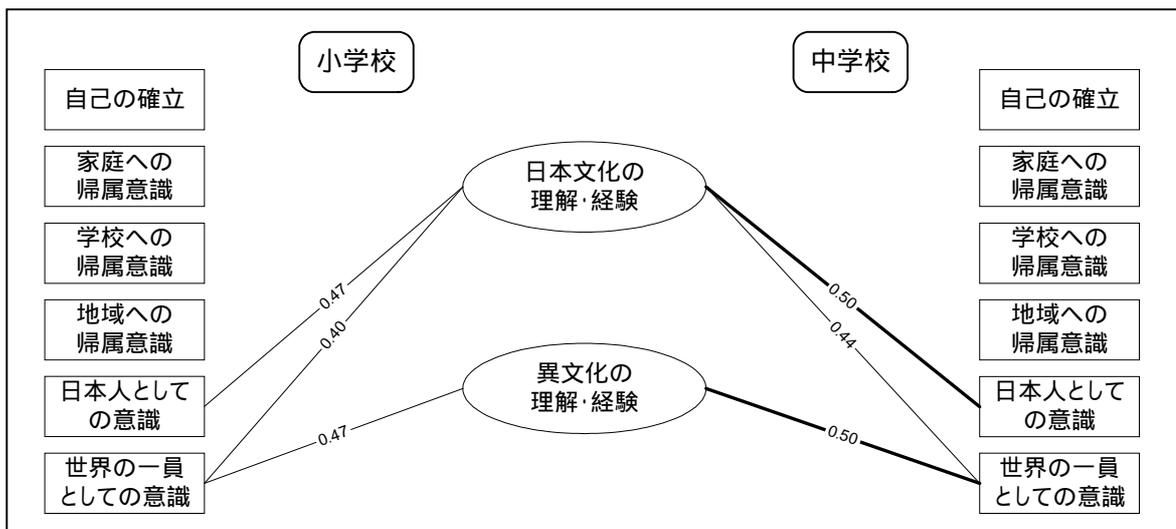
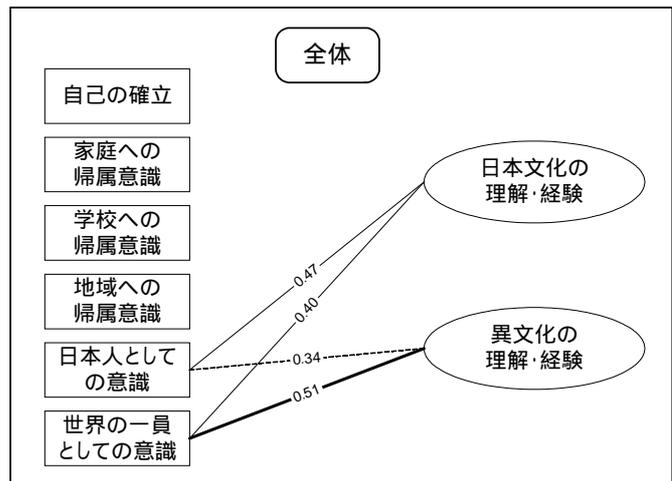
このことから、ボランティア活動などを通して「貢献意識」をはぐくむことは、「家庭や学校への帰属意識」「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」を高め、世界の中の日本人としてのアイデンティティの育成につながると考えることができる。

「規範意識」については、前にも述べたが設問に対する回答の数値は高いものの、世界の中の日本人としてのアイデンティティの「構成要素」との相関は見られないことが分かった。「規範意識」と世界の中の日本人としてのアイデンティティの「構成要素」との関係については、「規範意識」が身に付いていく過程をさらに詳しく分析することなどにより更に検討することが必要である。

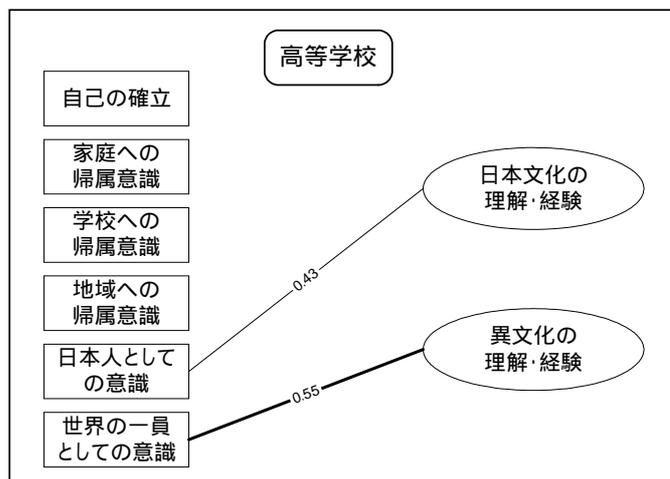
(3) 「日本文化の理解・経験」「異文化の理解・経験」と「構成要素」との関係

「日本文化の理解・経験」は、全体で見ると「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」と相関がある。

校種別にみると、小学校と中学校



では「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」の2つとの相関が見られ、特に中学校では「世界の一員としての意識」とは 0.50 の相関係数になっている。高等学校では「日本人としての意識」との相関が見られる。「日本文化の理解・経験」は「日本人としての意識」をはぐくむ重要な視点であると言える。



「異文化の理解・経験」は、全体で見ると「世界の一員としての意識」と0.51の相関係数を示す。校種別にみても同じ傾向であるが、小学校の相関係数は0.47、中学校は0.50、高等学校では0.55と、校種が上がるに従って相関が強くなっていく。これらのことから、「異文化の理解・経験」は「世界の一員としての意識」をはぐくむ重要な視点であることが分かる。特に、中学生、高校生段階での「異文化の経験や理解」は、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ上で重要であると考えられる。

また、「異文化の理解・経験」は全体で「日本人としての意識」と弱いながら相関があり、「日本文化の理解・経験」は「世界の一員としての意識」とも相関がある。「日本文化の理解・経験」「異文化の理解・経験」のいずれとも「日本人としての意識」「世界の一員としての意識」の両方に相関があることに注目する必要がある。

第 3 章でも述べたが、「日本人としての意識」と「世界の一員としての意識」は、「日本文化や異文化の理解・経験」などを通して、相互に関係しながらはぐくまれていくことを裏付ける調査結果であると言える。

3 世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ視点

最後に、7つの視点の間の相関について考察し、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ視点について整理する。

	コミュニケーション能力	問題解決能力	感性	貢献意識	規範意識	日本文化の理解・経験	異文化の理解・経験
コミュニケーション能力		0.46	0.50	0.47	0.27	0.39	0.41
問題解決能力	0.46		0.32	0.37	0.17	0.41	0.39
感性	0.50	0.32		0.36	0.17	0.36	0.36
貢献意識	0.47	0.37	0.36		0.14	0.40	0.33
規範意識	0.27	0.17	0.17	0.14		0.08	0.01
日本文化の理解・経験	0.39	0.41	0.36	0.40	0.08		0.51
異文化の理解・経験	0.41	0.39	0.36	0.33	0.01	0.51	

まず注目されるのが、「日本文化の理解・経験」と「異文化の理解・経験」の相関である。この2つの間には、相関係数0.51というやや強い相関がある。このことから「日本の文化の理解・経験」と「異文化の理解・経験」とは、その内容に相互に関連性があるのではないかと考えられる。

「コミュニケーション能力」は、「問題解決能力」「感性」「貢献意識」「異文化の理解・経験」との相関が見られる。特に小学生では「問題解決能力」との間の相関係数は0.55となっており、やや強い相関がある。中学生では「感性」「貢献意識」との間でそれぞれ相関係数が0.51、0.54となっており、やはりやや強い相関がある。世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむために、「コミュニケーション能力」の育成は重要な課題となっ

ていることが分かる。本調査では、前節でも示したように「コミュニケーション能力」にかかわる質問は、対人関係を中心に構成している。したがって、人とかかわる活動を通してコミュニケーション能力を培うとともに、他の育成の視点も併せて身に付けていくような学習活動を構想することが有効であると考えられる。

「問題解決能力」は、「コミュニケーション能力」のほかに「日本文化の理解・経験」と相関がある。単に日本の文化を知識として理解するだけではなく、主体的な問題解決学習を通して、日本の文化や日本の文化を受け継いでいる人に触れさせていくことの重要性を指摘することができるであろう。

以上、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ視点について、その実態、構成する要素との相関関係、視点相互における相関関係の3つの側面から見てきた。その中で明らかになってきたことを整理すると次のようになる。

- 「コミュニケーション能力」「問題解決能力」「感性」などのこれからの教育活動で重視すべき資質・能力は、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむための重要な視点になると考えられる。
- その中でも、「コミュニケーション能力」は多くの世界の中の日本人としてのアイデンティティの「構成要素」や育成の視点との相関関係を示しており、特に重視すべき項目である。
- 「感性」は、「日本人としての意識」をはぐくむ上で重要な視点になっていると考えられる。
- 「規範意識」は、質問に対する回答の数値は高くても他の項目との相関が見られず、本調査研究の結果からは「世界の中の日本人としてのアイデンティティ」との関係を見出すことはできない。
- 「異文化の理解・経験」は「世界の一員としての意識」と、「日本文化の理解・経験」は「日本人としての意識」とそれぞれ関係がある。
- 「日本文化の理解・経験」と「異文化の理解・経験」は相関があり、両者の内容には相互に密接な関係があると考えられる。

世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育実施上の留意点 ～ 発達段階に着目した調査・分析結果から～

ここでは、 章及び 章で述べた項目以外の調査結果の分析をもとに、児童・生徒の発達段階による意識の違いと、それを踏まえた教育活動実施上の留意点について述べる。

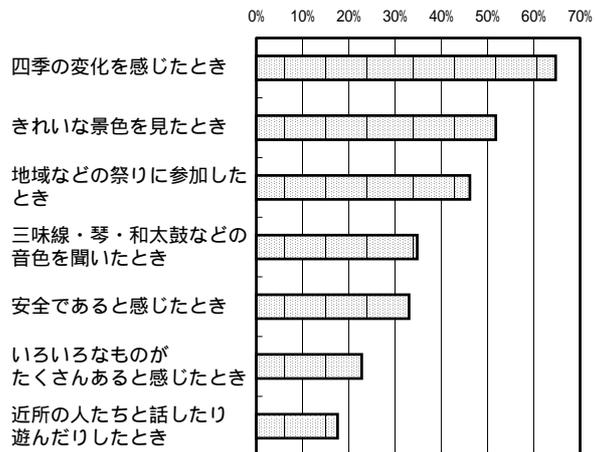
1 「日本のよさを感じる時」等の調査結果の概要と考察

(1) 「日本のよさ」に関する意識

[質問] 日本のよさを感じるのはどんなときですか。3つ選んで をつけてください。

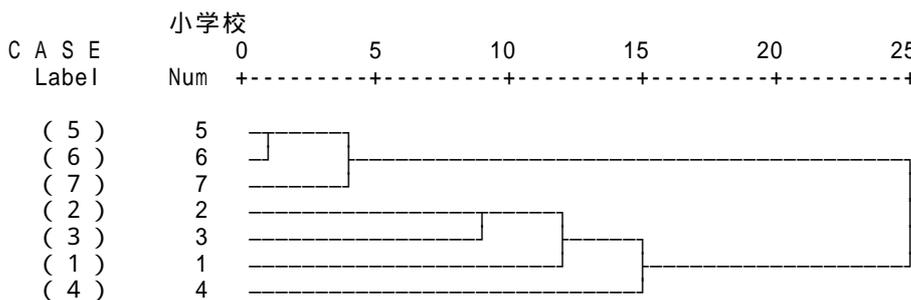
- (1) 日本の楽器(三味線や琴、和太鼓など)の音色を聞いたとき
- (2) 四季の変化を感じたとき
- (3) きれいな景色を見たとき
- (4) 地域などの祭りに参加したとき
- (5) 近所の人たちと話したり遊んだりしたとき
- (6) いろいろなものがたくさんあると感じたとき
- (7) 安全であると感じたとき

日本のよさを感じる時(全体)



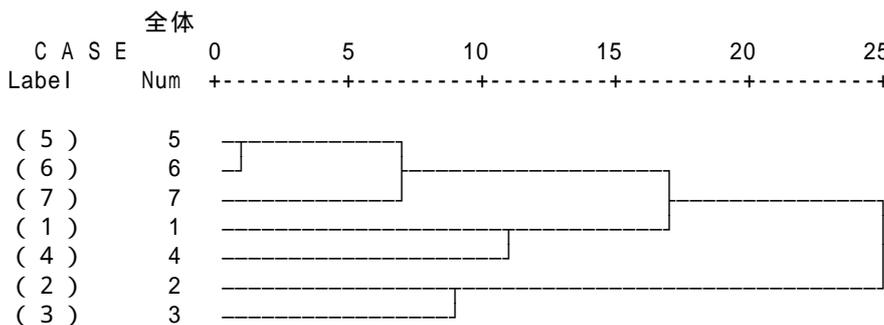
日本のよさをどんなときに感じるかを尋ねたところ、児童・生徒の65%が「四季の変化を感じたとき」と回答し、「きれいな景色をみたとき」は52%、「地域の祭りに参加したとき」の回答は46%あり、多くが日本の自然や文化から日本のよさを感じていることがわかる。

次に、校種ごとにどのような選択肢を選ぶ傾向があるかについてみる。ここでは、児童・生徒が選んだ選択肢のうち統計的に類似性の高い選択肢を集め(クラスター分析)、類型をつくった。下の2つの図は小学校及び全校種を合わせた全体についてそれぞれ樹形図で示したものである。



小学校では、回答に次の2つの類型があることが分かる。

(5)(6)(7)
(2)(3)(1)(4)



全体では、小学校の類型がさらに2つに分けられることが分かる。

(5)(6)(7)
(1)(4)
(2)(3)

横軸方向の距離が近いほど、各項目間の類似性が高いことを示しています。

クラスター分析の結果から、全体については次の表のように回答の類型が3つあることが分かる。

身近な事象	(5) 近所の人たちと話したり遊んだりしたとき
	(6) いろいろなものがたくさんあると感じたとき
	(7) 安全であると感じたとき
日本文化	(1) 日本の楽器(三味線や琴、和太鼓など)の音色を聞いたとき
	(4) 地域などの祭りに参加したとき
日本の自然	(2) 四季の変化を感じたとき
	(3) きれいな景色を見たとき

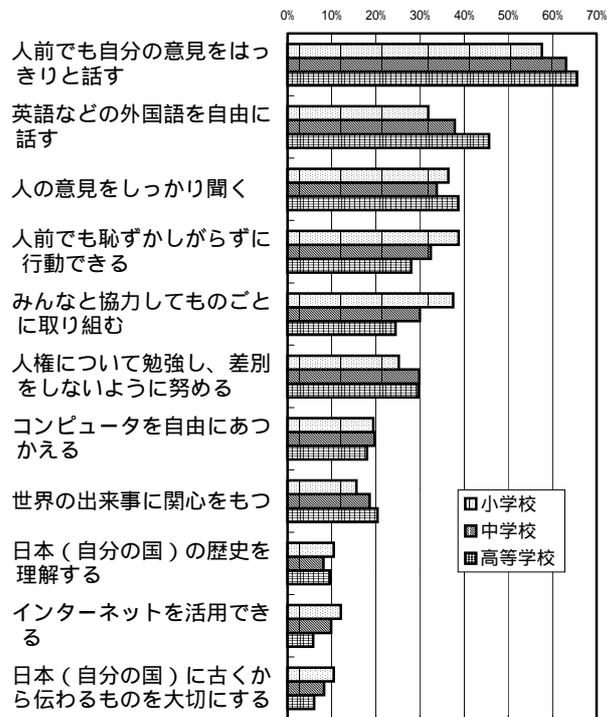
小学生の場合は回答の類型は2つである。それぞれの類型に含まれる質問項目から考えて、小学生は、中学生や高校生と異なり、「日本文化」と「日本の自然」を区別しないで回答していることが分かる。このように、発達段階により、日本のよさの感じ方は異なっている。

(2) 「世界で活躍するために必要な力」に関する意識

[質問] 将来、世界で活躍する人になるためには、どんなことができるようになればいいと思いますか。3つ選んで をつけてください。

- (1) 人前でも自分の意見をはっきりと話す
- (2) 人の意見をしっかり聞く
- (3) 人前でも恥ずかしながら行動できる
- (4) みんなと協力してものごとに取り組む
- (5) 人権について勉強し、偏見(公平ではない見方や考え方)をもったり、差別をしないように努める
- (6) 英語などの外国語を自由に話す
- (7) コンピュータを自由にあつかえる
- (8) インターネットを活用できる
- (9) 世界の出来事に関心をもつ
- (10) 日本(自分の国)の歴史を理解する
- (11) 日本(自分の国)に古くから伝わるものを大切に

世界で活躍するために必要な力



世界で活躍するために必要な力について尋ねたところ、右上のグラフに示したように、全校種にわたって「人前で自分の意見をはっきりと話す」等のコミュニケーション能力にかかわる項目が多く選択されており、その重要性が意識されていることが分かる。

コミュニケーション能力の中でも、「英語などの外国語を自由に話す」のように校種が上がるにつれて選択率が高くなるものと、「人前でも恥ずかしながら行動できる」のように逆に下がってくるものもあり、児童・生徒の発達段階により違いがあることが分かる。教育活動を構想する際には、このような違いを踏まえることが大切である。

選択率が低かったものには、「世界の出来事に関心をもつ」「日本(自分の国)の歴史を理解する」「日本(自分の国)に古くから伝わるものを大切にする」がある。その中の「世界の

出来事に関心をもつ」は校種が上がるにつれてやや選択率が高くなる傾向はあるが、他の2つの項目はいずれも世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむために重要であるにもかかわらず低いままであり、今後に向けての大きな課題であると言える。

2 「問題解決能力」等に関する小学校と中学校の比較（因子分析から）

世界の中の日本人としてのアイデンティティを育成する7つの視点である能力や学習体験を、児童・生徒がどのように受け止めているかを校種ごとに比較するため、因子分析を行った。その結果、いくつかの点で小学校と中学校では違いがあることが分かった。次の表は小学校と中学校について、因子分析の結果をそれぞれ因子3まで示したものである。

小 学 校				中 学 校			
質 問 項 目	因子1	因子2	因子3	質 問 項 目	因子1	因子2	因子3
-6 コミュニケーション能力	0.686			-3 異文化の理解・経験	0.599		
-4 コミュニケーション能力	0.677			-4 異文化の理解・経験	0.496		
-5 コミュニケーション能力	0.630			-2 異文化の理解・経験	0.495		
-4 貢献意識	0.507			-5 日本文化の理解・経験	0.423		
-2 問題解決能力	0.501			-6 コミュニケーション能力		0.585	
-1 問題解決能力	0.486			-5 コミュニケーション能力		0.570	
-3 問題解決能力	0.485			-4 コミュニケーション能力		0.564	
-5 日本文化の理解・経験		0.656		-5 規範意識		0.493	
-8 日本文化の理解・経験		0.498		-3 問題解決能力			0.669
-7 日本文化の理解・経験		0.452		-2 問題解決能力			0.570
-6 感性			0.583	-1 問題解決能力			0.485
-8 感性			0.553				
-7 感性			0.418				
-7 コミュニケーション能力			0.408				

小学校と中学校の結果を比較すると、小学校では中学校のように項目ごとの違いを分けてとらえていない傾向がみられる。そこで、中学校について先に分析を述べることとする。

世界の中の日本人としてのアイデンティティ育成の7つの視点のうち、中学校では因子1として「異文化の理解・経験」があがっている。「-3 自分から進んで外国の生活や文化について詳しく調べたことがある」「-4 外国の生活や文化の話聞いて、とても感動したことがある」等がその内容であり、中学校段階では重要な学習内容になっていることが分かる。また、この「異文化の理解・経験」に混じって「-5 日本(自分の国)に伝わる伝統文化を実際に体験したことがある」が同じ因子1としてあげられていることは興味深い結果である。中学生にとって、日本の伝統文化の経験は「異文化の理解・経験」と同じ意識で受け止められているとも考えられ、教育活動を構想するにあたっては配慮することが必要である。

中学校の因子2としては「コミュニケーション能力」があがっている。「-6 話すとき、相手や目的に合わせた言葉を使うようにしている」等がその内容である。この因子2に、「規範意識」として設定した「-5 みんなで決めた約束は、必ず守るようにしている」が入って

いることは興味深い結果である。この内容が中学生には規範意識としてよりも、コミュニケーションの一つの手段として受け止められている可能性もあり、検討を要する問題である。

中学校の因子3としては「問題解決能力」があがっている。問題を自ら見付けたり、自分で方法を考えながら追究したりする学習が大切であることが分かる。

小学校については、その因子1に「コミュニケーション能力」「貢献意識」「問題解決能力」の3つの視点が混在して入ってきている。このように、小学校ではいくつかの視点に属する内容が分化せず一つの因子に入る傾向が見られる。小学生には、「-6 話すとき、相手や目的に合わせた言葉を使うようにしている」「-4 他の人の仕事を、進んで手伝うことがある」「-2 学習していると知りたいことがたくさん出てくる」といった内容を同じカテゴリーでとらえる傾向がある。このことから、同じ「コミュニケーション能力」「問題解決能力」と言っても、中学校や高等学校とは異なった視点から学習指導を構想することが大切になってくる。

小学校の因子2には「日本文化の理解・経験」があげられている。「-5 日本(自分の国)に伝わる伝統文化を実際に体験したことがある」「-8 日本(自分の国)のことわざや言い伝えについて、家の人などから聞くことがよくある」「-7 自分の家では昔から伝わる季節の行事をよくやる」というのがその内容である。小学生にとっては、伝統行事の体験そのものが大切な学習であるとともに、家庭での体験が重要であることがこの結果から分かる。

小学校の因子3には「感性」を中心とする内容があげられている。「-6 『人間ってすごいな』と感動したことがある」「-8 新しい年を迎えたとき、新鮮な気持ちになる」と言う内容とともに、「コミュニケーション能力」にかかわる内容の「-7 外国語をつかって自分の考えを伝えてみたい」が同じ因子に含まれていることも興味深いことである。小学生にとっての外国語を使つての活動を考える上で今後検討したい内容である。

3 「構成要素」と「育成の視点」との相関関係(校種による違い)

「世界の中の日本人としてのアイデンティティ」の7つの育成の視点に関しては 章で詳しく述べたが、ここでは6つの構成要素と7つの育成の視点の相関関係が校種によりどのように違っているかについて考察する。

小学校

育成の視点 構成要素	コミュニケーション能力	問題解決能力	感性	貢献意識	規範意識	日本文化の理解・経験	異文化の理解・経験
自己の確立							
家庭への帰属意識							
学校への帰属意識							
地域への帰属意識							
日本人としての意識							
世界の一員としての意識							

ピアソンの相関係数が 0.4 以上、0.5 以上

の数は 10 個、は 5 個、合計 15 個ある。

コミュニケーション能力が重要な視点であることが分かる。

中学校

育成の視点 構成要素	コミュニケーション能力	問題解決能力	感性	貢献意識	規範意識	日本文化の理解・経験	異文化の理解・経験
自己の確立							
家庭への帰属意識							
学校への帰属意識							
地域への帰属意識							
日本人としての意識							
世界の一員としての意識							

ピアソンの相関係数が 0.4 以上、0.5 以上

は 9 個、は 6 個あり、合計 15 個である。

「日本文化の理解・経験」「異文化の理解・経験」にある点に特徴がある。

高等学校

育成の視点 構成要素	コミュニケーション能力	問題解決能力	感性	貢献意識	規範意識	日本文化の理解・経験	異文化の理解・経験
自己の確立							
家庭への帰属意識							
学校への帰属意識							
地域への帰属意識							
日本人としての意識							
世界の一員としての意識							

ピアソンの相関係数が 0.4 以上、0.5 以上

は 7 個、は 1 個で、合計 8 個と少なくなるが、第 4 章でも述べたとおり「異文化の理解・経験」の重要性が増していることが分かる。

校種により、7 つの育成の視点と 6 つの構成要素との関係は上記のように違っている。

小学校では第 3 章でも述べたが、「コミュニケーション能力」が重要であり、それと関係させた問題解決的な学習、感性を發揮させる学習が大切になっている。

中学校では小学校での留意点に加え、「日本文化の理解・経験」「異文化の理解・経験」の重要性が増していることが分かる。

高等学校では、相関のある項目が小学校や中学校と比べて少なくなっているが「異文化の理解・経験」と「世界の一員としての意識」との関係や、「貢献意識」と「学校への帰属意識」との関係などに着目し、ねらいに合わせて焦点化しつつ教育活動を工夫したいと考える。

4 学年進行にともなう実態の違いに着目した考察

ここでは、「世界の中の日本人としてのアイデンティティ」を育成する 7 つの視点の実態が学年進行にともなってどのように異なっているかに着目し、分析と考察を行った結果を述べる。

次の表は、7 つの視点にかかわる 23 の質問項目を、視点ごとに集計して平均を求めた結果をまとめたものである。網掛け部分は、その部分をまたがる学年間の学年進行により、その視点にかかわる平均値が統計的に有意差をもって高くなったり低くなったりしていることを示している。

7つの育成の視点に関する視点別平均

育成の視点 (質問項目の合計)	小学校 5年生	小学校 6年生	中学校 1年生	中学校 2年生	高等学校 1年生	高等学校 2年生
コミュニケーション能力	2.72	2.78	2.72	2.78	2.86	2.74
問題解決能力	2.53	2.57	2.33	2.43	2.40	2.40
感性	2.73	2.87	2.70	2.80	3.00	2.97
貢献意識	2.30	2.35	2.25	2.40	2.45	2.35
規範意識	2.35	2.40	2.30	2.45	2.40	2.45
日本文化の理解・経験	2.18	2.43	2.25	2.30	2.30	2.18
異文化の理解・経験	2.10	2.15	2.08	2.15	2.28	2.18

この表から、小学校6年生と中学校1年生の間ではすべての視点で平均が下がっていることが分かる。さらに、有意差検定の結果から、「問題解決能力」「感性」「日本文化の理解・経験」の3つの視点については、統計的に有意差をもって下がっていることが分かる。

「問題解決能力」の低下については、小学校に比べて中学校では問題解決的な学習がまだ十分でないことが理由として考えられる。「感性」の数値については、中学校1年生で最も低くなっており、その背景は今後明らかにしていく必要がある。また、「日本文化の理解・経験」については、小学校から中学校にかけて「日本文化の理解・経験」にかかわる具体的な学習内容を扱うことが少なくなるからではないかと考えられるが、今後さらに明らかにすることが必要である。

5 世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育実施上の留意点

第 章での分析と考察から、次の点が留意すべき点としてあげられる。

発達段階による違い

「世界の中の日本人としてのアイデンティティ」をはぐくむために有効な育成の視点は、校種によって異なっていること

小学生では「コミュニケーション能力」と「問題解決能力」の区別が明確になっていないこと

児童・生徒の多くは日本のよさを「日本の自然」「日本の文化」から感じとっているが、中学生及び高校生はこの2つを区別しているのに対して、小学生は区別していない傾向があること

意識の実態

小学校6年生と中学校1年生の間では「問題解決能力」等の数値の差が大きく、実態の違いが大きいこと

校種を問わず、「世界で活躍するために必要な力」として「コミュニケーション能力」の大切さを意識しているが、「自分の国に古くから伝わるものを大切にすること」「世界の出来事への関心」「自分の国の歴史への関心」を大切にしている意識は低いこと

以上の5点を踏まえ、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむための教育活動を構想することが大切である。

研究のまとめ

ここでは、研究のまとめとして、これまで述べてきた考え方や児童・生徒の実態、留意点等と現在学校で行われている教育活動とを関連させて考察し、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の具体化の視点を整理する。その上で2年次の研究に向けた課題を明らかにする。

1 世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の具体化の視点

世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育は、子どもたち一人一人が自分に自信をもち、家庭、学校、地域への帰属意識を高め、我が国の歴史や伝統文化などについて理解を深めつつ国際社会に生きるための広い視野をもてることを目指している。そして、このような教育を通して、「自分には社会の中でどのような役割があり、社会のために自分が何をできるか知っていること、あるいは知ろうと努力する子ども」を育成することをねらいとしている。

この考え方は、「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」等の4つの方針に基づいて改定された学習指導要領の考え方と基本的に合致している。すなわち、本研究が世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育のねらいとしてとらえた「児童・生徒が自分の役割に気付くこと」等の「自己の確立」は、学習指導要領においても基本的なこととして重視されている。このことは、平成10年7月の教育課程審議会答申が、道徳教育改善の基本方針において「次代を担う児童・生徒が、未来への夢や目標を抱き、自らを律しつつ、自分の利益だけでなく社会や公共のために何をなし得るかを大切に考え、広く世界の中で信頼される日本人として育っていくことは極めて重要なことである」と述べていることにも現れている。

このような学習指導要領の考え方と、本研究が明らかにした世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育のねらい、児童・生徒の実態及び指導上の留意点をもとに、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の具体化の視点を次のようにまとめた。

- (1) 学校においては、「児童・生徒が自分の役割に気付くこと」等の「自己の確立」を重視する教育を充実させることが大切である。この観点から教育目標や各教科等の目標を見直すことが必要である。
- (2) 本研究では、「自己の確立」と「日本人としての意識」には相関があることを明らかにした。ところが、児童・生徒の実態として、日本人としての意識をはぐくむために大切な「日本文化の理解・経験」の数値は低いという結果が調査から明らかになっている。学校では、各教科等の学習や総合的な学習の時間における活動を通して、我が国の歴史や文化を学ぶ機会を計画的に充実させる必要がある。
- (3) 「日本人としての意識」と「世界の一員としての意識」との間にはやや強い相関がある。また、「日本人としての意識」は「感性」と、「世界の一員としての意識」は「コミュニケーション能力」とやや強い相関がある。さらに、「問題解決能力」は「日本人としての意識」「世

界の一員としての意識」の両方にやや弱い相関がある。

「日本人としての意識」や「世界の一員としての意識」をはぐくむ教育を展開するにあたっては、その両者を関連付ける工夫をすること、さらに学習活動において児童・生徒が「感性」や「コミュニケーション能力」を十分発揮できる問題解決的な学習を工夫することが大切である。

- (4) 家庭や地域への帰属意識を育てることは「自己の確立」にとって大切である。道徳や特別活動、総合的な学習の時間等において地域の人々の協力を積極的に求めたり、学校間で多様な交流を図ったりするなど、家庭や地域と連携した教育活動を位置付け、児童・生徒が家庭及び地域と自分との関係に気付くことができるような教育活動を工夫することが大切である。
- (5) 「自己の確立」のためには、児童・生徒に物事に積極的にかかわる態度や主体的に判断する力、自分を表現できる力を育てる必要がある。学習指導にあたっては、児童・生徒が自分で考え、自分の考えをもち、それを自分の言葉で表現できる力を育成できるよう日常的に指導を工夫することが大切である。
- (6) 「自己の確立」のためには、児童・生徒が自らの生活や活動を振り返り、自分についてとらえ直そうとする態度や能力を育てる必要がある。この観点から、児童・生徒が自らの学習過程を振り返り、新たな自分の目標や課題をもって学習を進めていけるような評価の在り方や方法を工夫することが大切である。
- (7) 本研究の調査結果から、「世界の人々のために役立つことをしたい」という意識が学年進行とともに下がること、「世界で活躍する人になるために必要なこと」として「世界の出来事に関心をもつ」と回答した児童・生徒が極めて少なかったことが課題として浮き彫りになっている。学校ではボランティア活動等の社会体験を一層充実させ、貢献意識を育てるとともに広い視野をもてるようにすることが大切である。

2 今後の課題

本年度は、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の考え方を明らかにし、児童・生徒対象の調査を行って実態を明らかにするとともに、それに基づいて世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の具体化の視点をまとめた。第2年次の研究に向けて次のような課題がある。

- (1) 学校における世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむための取り組み状況や課題を明らかにする。
- (2) 教育課程への位置付けについて提言する。
- (3) 各教科等における指導の考え方や具体的な指導内容を構想するとともに、その有効性を検証する。

研究のまとめ

ここでは、研究のまとめとして、これまで述べてきた考え方や児童・生徒の実態、留意点等と現在学校で行われている教育活動とを関連させて考察し、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の具体化の視点を整理する。その上で2年次の研究に向けた課題を明らかにする。

1 世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の具体化の視点

世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育は、子どもたち一人一人が自分に自信をもち、家庭、学校、地域への帰属意識を高め、我が国の歴史や伝統文化などについて理解を深めつつ国際社会に生きるための広い視野をもてることを目指している。そして、このような教育を通して、「自分には社会の中でどのような役割があり、社会のために自分が何をできるか知っていること、あるいは知ろうと努力する子ども」を育成することをねらいとしている。

この考え方は、「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」等の4つの方針に基づいて改定された学習指導要領の考え方と基本的に合致している。すなわち、本研究が世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育のねらいとしてとらえた「児童・生徒が自分の役割に気付くこと」等の「自己の確立」は、学習指導要領においても基本的なこととして重視されている。このことは、平成10年7月の教育課程審議会答申が、道徳教育改善の基本方針において「次代を担う児童・生徒が、未来への夢や目標を抱き、自らを律しつつ、自分の利益だけでなく社会や公共のために何をなし得るかを大切に考え、広く世界の中で信頼される日本人として育っていくことは極めて重要なことである」と述べていることにも現れている。

このような学習指導要領の考え方と、本研究が明らかにした世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育のねらい、児童・生徒の実態及び指導上の留意点をもとに、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の具体化の視点を次のようにまとめた。

- (1) 学校においては、「児童・生徒が自分の役割に気付くこと」等の「自己の確立」を重視する教育を充実させることが大切である。この観点から教育目標や各教科等の目標を見直すことが必要である。
- (2) 本研究では、「自己の確立」と「日本人としての意識」には相関があることを明らかにした。ところが、児童・生徒の実態として、日本人としての意識をはぐくむために大切な「日本文化の理解・経験」の数値は低いという結果が調査から明らかになっている。学校では、各教科等の学習や総合的な学習の時間における活動を通して、我が国の歴史や文化を学ぶ機会を計画的に充実させる必要がある。
- (3) 「日本人としての意識」と「世界の一員としての意識」との間にはやや強い相関がある。また、「日本人としての意識」は「感性」と、「世界の一員としての意識」は「コミュニケーション能力」とやや強い相関がある。さらに、「問題解決能力」は「日本人としての意識」「世

界の一員としての意識」の両方にやや弱い相関がある。

「日本人としての意識」や「世界の一員としての意識」をはぐくむ教育を展開するにあたっては、その両者を関連付ける工夫をすること、さらに学習活動において児童・生徒が「感性」や「コミュニケーション能力」を十分発揮できる問題解決的な学習を工夫することが大切である。

- (4) 家庭や地域への帰属意識を育てることは「自己の確立」にとって大切である。道徳や特別活動、総合的な学習の時間等において地域の人々の協力を積極的に求めたり、学校間で多様な交流を図ったりするなど、家庭や地域と連携した教育活動を位置付け、児童・生徒が家庭及び地域と自分との関係に気付くことができるような教育活動を工夫することが大切である。
- (5) 「自己の確立」のためには、児童・生徒に物事に積極的にかかわる態度や主体的に判断する力、自分を表現できる力を育てる必要がある。学習指導にあたっては、児童・生徒が自分で考え、自分の考えをもち、それを自分の言葉で表現できる力を育成できるよう日常的に指導を工夫することが大切である。
- (6) 「自己の確立」のためには、児童・生徒が自らの生活や活動を振り返り、自分についてとらえ直そうとする態度や能力を育てる必要がある。この観点から、児童・生徒が自らの学習過程を振り返り、新たな自分の目標や課題をもって学習を進めていけるような評価の在り方や方法を工夫することが大切である。
- (7) 本研究の調査結果から、「世界の人々のために役立つことをしたい」という意識が学年進行とともに下がること、「世界で活躍する人になるために必要なこと」として「世界の出来事に関心をもつ」と回答した児童・生徒が極めて少なかったことが課題として浮き彫りになっている。学校ではボランティア活動等の社会体験を一層充実させ、貢献意識を育てるとともに広い視野をもてるようにすることが大切である。

2 今後の課題

本年度は、世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の考え方を明らかにし、児童・生徒対象の調査を行って実態を明らかにするとともに、それに基づいて世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育の具体化の視点をまとめた。第2年次の研究に向けて次のような課題がある。

- (1) 学校における世界の中の日本人としてのアイデンティティをはぐくむための取り組み状況や課題を明らかにする。
- (2) 教育課程への位置付けについて提言する。
- (3) 各教科等における指導の考え方や具体的な指導内容を構想するとともに、その有効性を検証する。

参 考 文 献 一 覧

- E．H．エリクソン（仁科弥生 訳）『幼児期と社会』みすず書房 1977 年
阿部謹也 『「世間」とは何か』講談社 1995 年
石原慎太郎 『いま、魂の教育』光文社 2001 年
賀来弓月 『内なるものと外なるものを』日本経済評論社 2001 年
河合隼雄 『日本人の心』潮出版社 2001 年
多田孝志 『学校における国際理解教育』東洋館出版社 1997 年
山本眞理子編 『心理測定尺度集』サイエンス社 2001 年
異文化間教育学会 『異文化間教育』9 1995 年
科学警察研究所 「家庭及び学校に対する中・高校生の帰属意識と非行との関連に関する研究」 1990 年
中央教育審議会 「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」第 15 期中央教育審議会第一次答申 1996 年
教育課程審議会 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について(答申)」1998 年
中央教育審議会 「新しい時代における教養教育の在り方について(審議のまとめ)」2001 年
東京都立教育研究所 「規範意識をもち自律的に行動する子どもの育成に関する研究」2000 年
東京都教育委員会 『「東京の教育 21」研究開発委員会指導資料集』1997 年
東京都 「東京構想 2000 - 千客万来の世界都市をめざして - 」2000 年
東京都 「心の東京革命行動プラン～次代のために、行動は今～」2000 年